

黒毛和種周年放牧繁殖牛の体型の特徴

紙 屋 茂

目 的

入来牧場では、周年放牧方式で繁殖牛を育成・管理している。放牧牛は舎飼牛に比較して運動量が多く、耐用年数も長く、省力管理が可能である等繁殖経営で有利な点が多い。しかし、舎飼牛と比較した放牧牛の体型の特徴や、生産される子牛の体型の特徴等は明らかにされていない。

そこで、本調査では周年放牧されている育成牛および繁殖牛について、体型の特徴を明らかにしようとした。

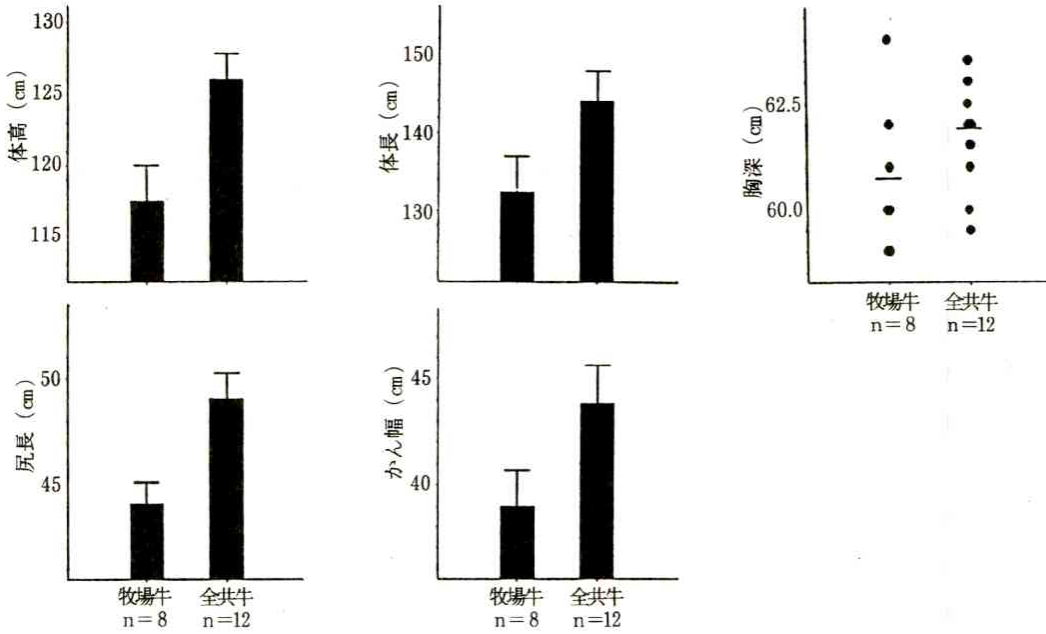
材料と方法

入来牧場で生産され、放牧されている育成牛（16ヵ月齢）8頭と第6回全国共進会出品牛（16ヵ月齢）12頭の体尺測定値を比較した。また、入来牧場で生産された周年放牧繁殖牛56頭、市場から子牛を導入し入来牧場で育成した周年放牧繁殖牛30頭および第6回全共出品繁殖牛56頭の体尺測定値を比較した。

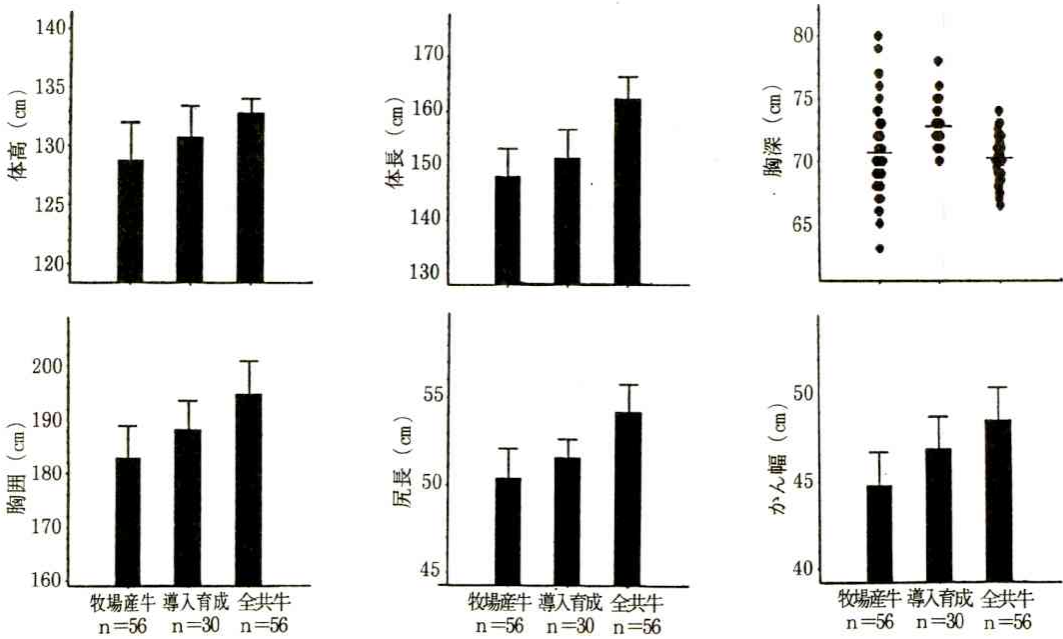
結果と考察

第1図に入来牧場の育成牛と全共出品育成牛の体尺測定値の違いを示した。育成牛の体高は両者間で有意な差が認められた。放牧育成牛の体高は発育標準曲線の下限值を示し、全共出品牛の体高は発育標準曲線の上限值を示した。体長、尻長およびかん幅も同様に両者間で有意な差が認められた。しかし、胸深は放牧牛がやや浅い傾向はあるが、両者間で有意な差が認められなかった。

第2図に入来牧場の繁殖牛と全共出品繁殖牛の体尺測定値の違いを示した。体高、体長、胸囲、尻長およびかん幅は、牧場生産の繁殖牛、導入育成された繁殖牛、全共出品繁殖牛の順で大きく、いずれも有意な差が認められた。体高では、牧場生産の繁殖牛の平均値は発育標準値以内であった。したがって、牧場生産の繁殖牛の体高は、最終的には発育標準値に達していた。しかし、登録審査を受ける時点では、体高が不足するケースが多く、育成段階で特に体高を伸ばす管理が必要であると考えられた。一方、胸深では牧場生産の繁殖牛や導入牛では、全共出品繁殖牛より深い傾向がみられたが、3者間で有意な差は認められなかった。胸深に有意な差が認められないことや、体長および尻長が短く、かん幅が狭いことについては、生産性との関連で、今後更に注目していくべきであると考えられた。



第1図 入来牧場の育成雌牛と全国共進会牛（16カ月齢）の体尺測定値の違い



第2図 入来牧場の繁殖牛と全国共進会牛（繁殖牛）の体尺測定値の違い